

## 才七回大会の印象

有 賀 喜左衛門

一九五九年度大会後拡大委員会の開かれた時、研究通信に今年のは病後で研究発表を全部書くことができなかつたので、大会印象をかく適任者であるとは思っていない。したがって私本位の感想にとどまる。もつと多数の会員諸君と話合つて書いた方が爽のあるものになると思つているが、時間の余裕もないので引受けた。

政治と村落という共同課題で大会が運営されたが、まとまつた焦点が結ばれなかつたように思う。前年の大会は村落共同体の概念を明かにしようとして、結局はまとまらなかつたとしても、鳴子温泉

で二泊して研究発表の外にかなりつつこんで討論をしただけあつて相当に共通点も見出したし、収穫もあつたと思つた。今年の共同課題はその延長として村落共同体を成立させる一条件として政治がどんな作用を及ぼしているかを目標として共同課題が選ばれたはずだと私は思つていたが、今年はその点にはほとんどふれなかつたので問題点が別の方向に向いてしまつたような印象をうけた。

今年の大会において問題の焦点を結ばなかつたと私に思われるのは、単に去年の総会できめた共同課題の主旨がずれたというばかりでなく、ずれた為には主旨が消えて、政治と村落という主題を各人思い思いに選んだということにもあるように思われる。もちろん各発表者の研究内容が悪いといつていいのでない。むしろそれぞれ方のはいつた興味のあるものであつたと私は感心しているが、村落と政治との関係が多面的に説かれたので、討論において問題点を合せることが大変むずかしくなつてしまつて、散漫になつてしまつたと思つている。

今年は大いに際して会員の研究発表の申込が非常に少かつたことが事務局を大いに苦しめた。これは共同課題がむずかしかつたから申込者が少かつたのか、あるいは他に理由があつたかも知れないが、それらの事情から事務局がプログラムを作るのにひどく苦勞しなければならなかつたことも、深く影響していたのである。ともかく今年の研究発表はこういう事情の下に行われた。個々の研究発表は持時間も比較的多かつたから、相当に力のはいつたものであつたのに、討論において一つの焦点に強く集中してゆく迫力に欠けたのは会員全体にそういう意欲が足りなかつたのではないかと思われ、研究発表者に対し申し訳ない気持がする。次年度は大会の運営について会員全体がもつと積極的に参加してほしいと私は希望している。

村研は社会学専攻の者ばかりの会ではないから、社会学ばかり引合に出しては恐縮だが、少くとも農村社会学では従来は政治の問題に余りふれて来なかつたので、政治と村落という題目は苦手であつたように思われる。大島太郎さんのような政治学の専門家の主張を

聞いてみると、大変歯切れがよくて、大島さんなりに一応はつきりした線が出ていた。こういう人が討論に参加してくれたのだから、もう少し共同課題を深めることができればよかつたが、力が不足していたように思う。大島さんの発言は明治以来の自治体が政府の政策の変化と共に地主本位のものから自営農民層本位のものに動いて来たことを説いて非常に興味があつたが、この説明を聞いただけで、この説に対する反駁も積極的支持もなかつたことが私の記憶に残つてゐる。私達にとつてこの説を肯定するにしても、否定するにしても、自治体の時代的变化の中で村落がいかにこれらの政策に反応して、村落の生活を替えて来たかを具体的に示さなければならぬ。我々は村落構造という言葉をよく用いて来たが、それを内容づけずける各種の家連合の内面的変化や相互関係を必ずしも深く追求でき

たのではない。したがつて村落の規定もまた十分ではないように思われる。これを十分ならしめるにはその内部的分析だけでは足りないと思つたので、明治以来成立した自治体や農業団体、それらを通して及ぶ上級の政治や経済の制約をも見た上での村落構造の変化を深く見つけて行かねばならないと思つてゐる。

こういうことは政治学や経済学などのように全体社会の体制の研究が組織的に進んでいる例についてはいろいろ程のこともないのであるが、そこでもなお個々の村落のモノグラフは必要な段階にあるのだから、共通の学び方の上で補足し合うことはできると思う。

個々の研究についてのべることができなかったが、許して頂きたい。(一九五九年一月二十六日記)